

# 論文

前期ドゥルーズの〈アルコリズム〉の時間論的意義について  
—ゾラ、フィッツジェラルド、ラウリーとともに—

小谷 弥生\*

## The temporal significance of <Alcoolism> of Deleuze - with Zola, Fitzgerald and Lowry-

KOTANI Yayoi

### 論文要旨

前期ドゥルーズの時間論において、未来 (avenir) の根源的原理は〈死の本能〉であり〈亀裂 (fêlure)〉と等しいと定義される。これに本質的に関わるものとして、ゾラ『獣人 (*La Bête humaine*)』、フィッツジェラルド『亀裂 (*The Crack-up*)』、ラウリー『火山の下 (*Under the volcano*)』の三つの偉大な作品が提示されている。本論はこれらに共通して見出されるテーマのうち〈アルコリズム (alcoolisme)〉に着目することで、それが時間論的技法としての意義にとどまらず、哲学的な概念および〈主義=isme)〉として再評価されるべきものであることを論じることで、ドゥルーズ哲学の解釈に寄与することを企図する。

キーワード ドゥルーズ、アルコリズム、ゾラ、フィッツジェラルド、ラウリー

### Abstract

In the early Deleuzian, three great literary works that are essentially related to the concept of "fêlure", which is important in understanding Deleuze's theory of time. Zola's "*La Bête humaine*", Fitzgerald's "*The Crack-up*" and Lowly's "*Under the volcano*", are presented as three great literary works. This paper contributes to the interpretation of Deleuze's theory of time by re-evaluating and discussing the reason that Alcoolism of Deleuze should be interpreted as a time-theoretic technique, and its true meaning as a philosophical concept and "ism (isme)".

Keywords: Deleuze, Alcoolism, Zola, Fitzgerald, Lowry

---

\* 信州大学医学部医学科 助教 ; yayoikotani63@gmail.com

## 序

ジル・ドゥルーズ (1925-1995) の哲学、とりわけ『差異と反復』(1968) を中心とした前期著作の時間論において、最も独自の論じられるのは「未来 (avenir)」である<sup>(1)</sup>。ドゥルーズは「未来」について、一般的に用いられる「未来 (futur)」の語ではなく、将来という意味合いを含んだ「未来 (avenir)」の語によって示し、期待の有機的な形式としての欲求の中に現れる非本来的な未来 (futur)、探求の対象である真の未来 (avenir) として区別している<sup>(2)</sup>。そしてこの区別の根底には、ドゥルーズの時間論における「未来 (avenir)」とは「死の本質としての未来」<sup>(3)</sup>があるといえるだろう。「未来」とは本来的に死と密接に関わるものであり、そして私の死という事態は、生きている者としての私が、死にゆく私、あるいは死する私として経験可能であるとしても、それを生きている現在において、語りうる出来事として経験不可能であることをも意味するはずである。すなわち死とは、個体の宿命として完了形で語りえぬ点において、出来事のうちに最も特異的であり、常に共にありつつも未来に属している。それゆえ、ドゥルーズが『差異と反復』の名によって示さんとしているのは、「(純粋な) 差異」と「(真の) 反復」、すなわち「未来 (avenir)」をもたらすものの名であると見立てることができる。未来とはまさしく未知なるものであり、未来を問うことは「全き新しさ」としての未来はいかに可能化するのか、という問いであるといえよう。

しかしドゥルーズが「未来」の根源的原理を〈死の本能 (instinct de mort)〉と示したことによって、この概念はフロイト由来であり非哲学的なものとして了解され、その詳細について触れられることはなかった。さらにドゥルーズが〈死の本能〉という語を用いたことは、不遇にも世界的に生じた「死の欲動」の誤訳の一環であると位置づけられ、死の欲動と同義であると見なされてきた。〈死の本能〉について明確な概念定義がなされなかったことも重なり、ドゥルーズの時間論、とりわけ〈未来〉の解明は、半ば放棄されてきたといえよう。

そこで本論は、ドゥルーズが意図的に〈死の本能〉の語を用いたという解釈に立脚し、〈死の本能〉を知る手がかりとして、これと等しいものと示される〈亀裂 (fêlure)〉<sup>(4)</sup>に着目する。この〈亀裂〉もまた、〈死の本能〉同様

に極めて隠喩的な概念として提示されているため、〈亀裂〉に関するドゥルーズの記述もわずかなものであり解釈は困難を極めるが、その理解を促す貴重な一文が『差異と反復』の脚注に一箇所残されている。

「死の本能として理解される時間形式と本質的に連関している《私の〈亀裂〉》というテーマについては、三つの偉大な、しかしたいへん異なる文学作品が想起されるであろう」<sup>(6)</sup>。

この三作品こそ、本論が着目するゾラ『獣人 (*La Bête humaine*)』<sup>(6)</sup>、フィッツジェラルド『亀裂 (*The Crack-up*)』<sup>(7)</sup>、ラウリー『火山の下 (*Under the volcano*)』<sup>(8)</sup>である。ドゥルーズがこれらの作品に共通して見出したものは〈死の本能〉であり、〈亀裂〉であり<sup>(9)</sup>、さらには〈アルコリスム (*alcoholisme*)〉でもあった<sup>(10)</sup>。この〈アルコリスム〉もまた、〈死の本能〉同様、哲学的概念としては異端であり、単に「アルコール中毒・依存 (者)」を示すものと見なされ、解釈の意義を見出されずにいた。しかしドゥルーズの〈アルコリスム〉とは、決してアルコール中毒や依存のような状態 (人物) を意味するものではなく、むしろ「現在」という分析困難な時間を経験し、それを凝視する上で重要な効果 (*effet*)<sup>(11)</sup>として見出された、まさに時間論的意義をもつドゥルーズ独自の概念である。そこで本論はドゥルーズの時間論における根源的原理 (〈死の本能〉および〈亀裂〉) の解明に取り組む一路として、ドゥルーズの〈アルコリスム〉の意義に着目し、これについて論じる。

## 1. 〈死の本能〉と〈亀裂〉：三つの文学作品と〈アルコリスム〉、そして現在の意義

ドゥルーズは〈亀裂〉というテーマにおいて、三つの文学作品 (ゾラ『獣人』、フィッツジェラルド『亀裂』、ラウリー『火山の下』) を示した。しかしこれら三作品について、ドゥルーズが同時に言及しているのはわずかに二箇所である。第一に、『差異と反復』における先述の原注において、三作品が「死の本能として理解される時間形式と本質的に連関している私の亀裂というテーマ」に関わるものとして示す箇所 (前掲 3)。第二に、仏語版

『獣人』の序文において、括弧入れてフィッツジェラルドとラウリーの名を挙げつつ、三者が〈亀裂〉という大いなるテーマに関わる作家であると示す箇所<sup>(12)</sup>である。どちらも内容的には、「三作品が〈亀裂〉のテーマに係る」という示唆にとどまり、ドゥルーズは〈亀裂〉というテーマにおいて、これら三作品を同時に比較・検討した論考は行われていない。『獣人』の序文は、加筆修正が施された上で「付録 V. ゴラと亀裂 (*Zola et la fêlure*)」<sup>(13)</sup>として、またフィッツジェラルドとラウリーについては「第二十二セリー磁器と火山 (*porcelaine et volcan*)」<sup>(14)</sup> (以下「磁器と火山」)として、共に『意味の論理学』(1969)に収録されている。したがって本論は、三人の偉大な文学者およびこれら三作品の関係性について、〈死の本能〉と〈亀裂〉、とりわけ〈アルコリズム〉という観点より明らかにすることを企図する。

そこで前掲の注釈「死の本能として理解される時間形式と本質的に連関している《私の〈亀裂〉》というテーマについては、三つの偉大な、しかしたいへん異なる文学作品が想起されるであろう」<sup>(15)</sup>という一文の解明が、本論の解釈の軸となる。まず「死の本能として理解される時間形式」が「未来」を示していることに着目しよう<sup>(16)</sup>。この原注はドゥルーズの時間論の中でも、とりわけ未来に関わるものであるといえよう。ドゥルーズによれば、時間とは「瞬間の反復に関わる根源的総合のうちでしか構成されない」<sup>(17)</sup>ものであり、根源的総合とは、瞬間というものを累積的に縮約することで生ける現在を構成する。時間は現在において展開されるため、過去も未来も現在に属するのである。ゆえに「未来」を思考するためにも、現在を介することが不可避なのであり、その現在を思考可能な状態において捉えることが重要な課題となる。

よってこの一文は、第一に「死の本能として理解される時間形式（未来 (*avenir*)) と本質的に連関しているのは私の亀裂というテーマである」、第二に「この（私の亀裂という）テーマについては、三つの偉大な、しかし非常に異なる三つの文学作品（『獣人』、『亀裂』、『火山の下』）が想起されるであろう」、という記述として整理することができる。私の〈亀裂〉というテーマについて、三つの文学作品が「非常に異なる作品」であるにもかかわらず同時に想起されるのは、それらが異なり以上に共通して〈亀裂〉というテーマを有しているためなのである。

ここでようやく「三つの偉大な作品」を分析・検討する道筋が見えてきた

といえよう。重要なのは、仮に「非常に異なる」と形容される作品の多様性が《私の〈亀裂〉》を表現する文学上の多様性であったとしても、そこで描写され、共通する〈亀裂〉の本質とはいかなるものであるのかを見抜くことである。ゆえに、これら三作品に通底する〈死の本能〉すなわち〈亀裂〉の本質を明らかにするためにも、稀有な共通点として見出されていた〈アルコリズム〉の検討が要請されるのである。

## 2. 〈亀裂〉と〈アルコリズム〉 —ドゥルーズ時間論における現在の硬化作用

ドゥルーズによれば、〈亀裂〉は偉大なテーマであると同時に、常に〈アルコリズム (alcoholisme)〉との関係において意味を見出すものである。ドゥルーズが三作品のうちに見出す共通項が〈亀裂〉と〈アルコリズム〉である点については、以下の一文に示されている。

「ゾラは偉大なるテーマを投げかける。それは異なる形態のもと、異なる方法で、現代文学によって繰り返されるであろうし、それはまた常に、アルコリズムとの特別な関係に意味を見出すのである。すなわちそれは亀裂というテーマである (フィッツジェラルド、マルコム・ラウリー)」<sup>(18)</sup>。(下線強調筆者)

この「アルコリズムとの特別な関係」とはいかなるものであるのか。〈アルコリズム〉が示す内容についてもまた、〈死の本能〉同様、ドゥルーズの真意は十分に汲み取られていない。われわれはまず、邦訳のアルコリズムの語には [=アルコール中毒・依存] との訳注が配され了解されている点に留意する必要があるだろう<sup>(19)</sup>。確かにアルコリズムは、一般に「アルコール中毒(者)」を示す語である。しかし次の一文を見れば、ドゥルーズがこの語によって示さんとしているものは、アルコール中毒(者)・依存とは明らかに異なることがわかる。

「アルコリズムは、快楽を探求しているのではなく、効果を探求しているように見える。その効果は主に、現在が非日常的な硬化 (extraordinaire induration)

をなすことである」<sup>(20)</sup>。

ここで示される〈アルコリズム〉は、単なる酩酊や泥酔状態ではなく、むしろアルコールの効果によって可能化された主体の意識、通常では経験不可能な時間意識の体験と観察を行うものとしての時間の変容として理解されるべきである。すなわち「快樂の探求」ではなく「効果 (effet) の探求」としてのアルコール<sup>(21)</sup>という観点において、〈アルコリズム (alcoholism)〉の *isme* (英: *ism*) はむしろ、中毒ではなく主義や態度としての〈アルコール (alcohol) - 主義 (isme)〉であるといえよう。それはアルコールを用い、アルコールの効果によって、能動的に獲得する「現在」という時間の異形と、そのような「現在」における意識状態と自己観察、すなわちそれらすべてを自らの経験とし、思考と記述を可能化する技法としての〈アルコリズム (alcohol-isme)〉なのである。

時間を可能な限り引き延ばしつつも、我々が時間の内に身を置くことができるのは「現在」と呼ばれる時間性のみである。ドゥルーズは経験不可能な「現在」を言語化するために最も申し分のない方法がアルコールである<sup>(22)</sup>として、「磁器と火山」の後半部分「アルコリズム、衰弱させる偏愛 (*Alcoolisme, manie dépressive*)」<sup>(23)</sup>において、フィッツジェラルドとラウリーの文学作品に言及しつつその意義を論じている。

「フィッツジェラルドやラウリーが、超感覚的な形而上学的亀裂について語る時、また、彼らの思考の場と固定観念、思考の源泉と枯渇、意味と無意味を同時に見出すとき、彼らは飲み干されたアルコール、身体のうちに亀裂を生じさせたアルコール全てによって、それを成就させているのである」<sup>(24)</sup>。(下線強調筆者)

ドゥルーズは〈アルコリズム〉について、単にアルコール中毒や、酩酊、陶酔といった非現実性に埋没するような精神・身体的状態にとどまるものであるとは考えていないことがわかるだろう。確かにアルコールは身体のうち〈亀裂〉を生じさせる方法でもあるが、ドゥルーズがその先に見出す

ものは、通常の時間においては不可能な「超感覚的な形而上学的亀裂について語る」ことであり、人間が平常時には捉えることのできない「現在」を硬化させ、瞬間としての現在から「複合過去（*passé composé*）」の時間性へと変容させるアルコールの〈作用〉なのである<sup>(25)</sup>。

ここで「複合過去」として示された時間は、フランス語に固有のものであり、日本語にはない時制である。複合過去は、文法的には過去および現在完了を表す場合があるが、中でも文語としての現在完了は、単純過去に置き換えることのできない時間性として、過去と現在を架橋する意味を持つといえよう。すなわち、過去に完了した行為について、その結果としての現在の状態、現在までの経験、現在まで反復された行為または現在までの継続の状態など、過去を現在との関連で表す記述法である<sup>(26)</sup>。

それは「硬化する現在」と「硬化した現在が包み隠す柔らかさ」という二つの契機（*moments*）の交接であり、時間の複合であり、まさしく「現在」についての記述を可能にするという意義において重要な時間性であるといえよう。ドゥルーズは、この複合過去は極めて特殊なものであり、隔りや完遂を表現しないもの、アルコールの摂取によって想像的な過去を複合し、あらゆる意味において対象を喪失するものであるという<sup>(27)</sup>。すなわちドゥルーズが用いる〈アルコリズム〉はその経験と観察、思考と記述を同時に可能化する〈技法〉なのであり、これが関わるのが、時間の中でもとりわけ「現在（*present*）」である点に着目すべきである。

アルコールによって自ら獲得された〈亀裂〉とは、まさしく能動的に獲得された出来事であり、経験であり、観察と記述が可能な時間であるがゆえに、思考の場となりうるのである。ドゥルーズは〈亀裂〉が安寧した生とは対極にあり、身体を危険に曝すものでありながらも、それが思考において不可欠であると認めていた。

「なぜ健康だけでは十分ではないのか。なぜ亀裂が望ましいのか。そう問われるとすれば、それはおそらく、亀裂のさなかで、そしてまた亀裂の淵でのみ思考してきたためである」<sup>(28)</sup>。

これこそが、〈亀裂〉の意義、そしてやがては崩壊へと向かわざるを得な

いことを運命としながらも、〈アルコリスム〉が内包するある種の分裂的狀態、二重性、そして実現される時間性を希求せざるを得ない理由なのである。そして何より〈亀裂〉が〈死の本能〉と等しいとされる根拠でもあるといえよう。ゆえにドゥルーズ哲学においては、このようにして実現され、能動的に獲得された状態、すなわち〈亀裂〉の生じた自我という状態こそが、思考するためには不可避かつ不可欠な「条件」なのである。そしてドゥルーズが「非常に異なる偉大な三作品」と名指した三つの文学作品(『獣人』、『亀裂』、『火山の下』)において、「死の本能として理解される時間形式と本質的に連関している《私の〈亀裂〉》というテーマ」(前掲5)は、まさしく三者三様に描かれた物語として生きられているといえよう。

それでは各々の作品において、〈アルコリスム〉と〈亀裂〉は、いかなるものとして描かれているのだろうか。また、その差異と同一性は、いかなるものとして把握可能であろうか。以下、三作品それぞれについての検討を各節(3.~5.)において行う。

### 3. 遺伝における亀裂と〈アルコリスム〉: ゾラ『獣人』

ドゥルーズは〈アルコリスム〉について、経験と観察、思考と記述を同時に実現するために重要な技法であると位置付ける一方で、これを「喪失の法則」でもあるという<sup>(29)</sup>。そしてフィッツジェラルドもラウリーも、この「喪失の法則」に該当していると記されているが、この喪失の法則に関しては、ゾラもまた同様であるといえよう。『獣人』(1890)の主人公ジャック・ランチェはルーゴン・マッカーール族の一員である。一族の遺伝の結果、その末裔としてのジャックの人生を鑑みると、アルコールはまさしく「喪失」をもたらすものである。ジャックが悩まされている「遺伝性の亀裂」は、まさしく大酒飲みの先祖たちの血に由来するものであり、一族を運命づける根源的なもの、彼らのアルコールの罪のせいでジャック自身の血もまた毒されてしまった、自覚的な〈亀裂〉として捉えられている。

『獣人』における〈アルコリスム〉は、とりわけアルコール「本能」として示される。それは貧民が還元される本能としてのアルコールであり、苦しい生活を堪える唯一の方法として、彼らが本能的に求める対象なのである

(30)。しかしゾラが描く最も中心的な〈亀裂〉は、ルーゴン・マッカール家に伝達する全て、病気の全て、すなわち「遺伝」である。この、遺伝における〈亀裂〉は「亀裂以外の何をも伝達しない」知覚不可能なものとして、〈亀裂=fêlure〉という言葉が本来的に内包する「精神異常」の様相を最も色濃く反映している(31)。

「一族の中には平穏な者がほとんどおらず、その多くが亀裂を持っている。彼もまた亀裂を、遺伝性の亀裂 (fêlure héréditaire) を自らのうちに大いに感じることがある。(…) 彼は大酒を飲むことはなかったし、グラス一杯のブランデーでさえも自らに禁じ、ほんの一滴のアルコールでさえ彼を気狂いに戻すということに注意していた。」(32)

女性を殺したいという欲求に悩まされていたジャックは、その欲求は代々大酒飲みであった祖先の罪が原因であり、子孫である自らの血の健康が損なわれ、毒が回り、ついに女性を殺したい発作に襲われるのだと考えていた。ジャックは極めて慎重にアルコールを飲まないよう禁じていたが、彼はほんの一滴のアルコールによって正気を、理性を、何より一族の血と歴史を背負った殺人欲求を封印する力を喪失するのである。

こうした殺人欲求について、ジャック自身は一族の汚れた血の本能であると考えていたが、『獣人』において本能と亀裂の相関関係が最高潮に至るのは、本能が「アルコールに由来する本能」へと生成変化し、ひび割れとしての亀裂が決定的に割れるとき(33)、すなわち〈亀裂〉にとどまっていたものが完全に割れる瞬間、自己が崩壊する時であるといえよう。ドゥルーズはジャックの両親の物語にあたる『居酒屋』(1876)について、アルコールに由来する本能はジェルヴェーズ(ジャックの母)において「遺伝的異常を引き起こすものとしての亀裂をひろげる」ものであると分析した。ゆえに、ゾラの『獣人』におけるアルコールの特別な役割とは、母と息子を結びつけるものでもあり、本能と〈亀裂〉の最も深い結合を成し遂げ、そして亀裂をひろげ推し進める力の契機として、独自の意義を見出されているのである(34)。

#### 4. 崩壊の過程と〈アルコリスム〉: フィッツジェラルド『亀裂』

フィッツジェラルド<sup>(35)</sup>の短編小説「*The Crack-up*」における〈亀裂〉は、何かが通過し、自己がひび割れ、そして壊れゆく自己省察の契機である。フィッツジェラルドの〈亀裂〉とは、崩壊そのものではなくその兆しであり、〈亀裂〉はあたかも古びた皿 (*an old dish*)<sup>(36)</sup>のような自己、その表面に走るひび割れとして、発見され、捉えられ、見事に描写されているといえよう。

「一すると突然、驚くべきことに、僕は回復した。

一そのことに気付くやいなや、僕は古びた皿のようにひび割れていた。」<sup>(37)</sup>

ここでは〈亀裂〉という出来事の経験、発見、そして言語化という、まさしく「複合過去」の時間性によって実現される「現在」が描かれている。フィッツジェラルドによって「皿のひび割れ」として捉えられた〈亀裂〉、その意義と本質を、誰よりも的確に見抜いた者こそドゥルーズであるといえよう。

「フィッツジェラルドの主人公にとって、アルコリスムとは、崩壊の過程そのものであり、この過程が過去の逃走の効果を決定するのである。このように、素面だった過去が主人公から切り離されるだけでなく、つい先ほど飲んでいた近い過去や、一時的な効果の幻影的な過去も、主人公から切り離されるのである。全ては等しく遠ざかってしまうので、さらにアルコールを飲むことが必要であり、あるいはむしろ、すでに飲み直してしまっていることが必要なのだと決意される。硬化して色褪せた現在、唯一存続し死を意味する現在に打ち克つためには、アルコールが必要であると決意されるのである。このような意味において、アルコリスムは典型なのである。」<sup>(38)</sup>

フィッツジェラルドの〈アルコリスム〉の特徴は、ゾラやラウリーとは異なり、登場人物が直接的に飲酒する場面を滅多に提示しない点において、ア

ルコールを欠如や欲求の形態として見ていない点にある<sup>(39)</sup>。確かにフィッツジェラルドの作品の多くは、アルコールがひとつの重要なテーマであるし、作中人物にとってアルコールは大きな位置を占め、時にはアルコール中毒になり、アルコールのせいでも人生や重大な場面で失敗することを極度に恐れている様も描かれている。しかし、フィッツジェラルドは飲酒それ自体を重視しているのではなく、アルコールとともに変化し、アルコール効果によって可能化する引き伸ばされた時間、その精神の描写に集中することで、彼らの内面世界を描き出すことに成功している。ドゥルーズはこうした「アメリカ流の現実感覚の破壊 (La dégradation réaliste)」について、それが表現するのは社会階級の病理学と行動障害であると分析する<sup>(40)</sup>。とはいえ、あらゆる社会や環境というものが病的であるという結論を導くのではなく、それらによって人間に生じる〈亀裂〉と自己省察、むしろ人間が〈アルコリスム〉を生じる契機の描写を評価し、フィッツジェラルドに惜しめない賛辞を贈る<sup>(41)</sup>。

それは例えばフィッツジェラルドが描いた人物、とりわけギャツビーの名と共に記されるように、「アルコールは、同時に、対象、対象の喪失、あらかじめ準備された崩壊の過程（「もちろん (bien entendu (英：of course))」における喪失の法則」というアルコールの結末)<sup>(42)</sup>なのである。言い換えるなら、全てが等しく遠ざかり、どこか言い当てることのできぬ時空間に滞留しているかのような状態、そして「すでに飲み直してしまっている」という表現こそ、まさしく〈複合過去として経験された現在〉の状態であるといえよう。

このような状態を端的に捉え、そして描くことに成功したという点において、フィッツジェラルドとともに検討されるラウリーもまた、ドゥルーズが語る文学作品において極めて重要な位置を占めるのである<sup>(43)</sup>。

## 5. 〈アルコリスム〉の幻影と永遠回帰：ラウリー『火山の下』

ドゥルーズによるラウリーへの言及は全著作を通して僅かではある<sup>(44)</sup>が、ドゥルーズにとってラウリーは非常に重要な作家であった。それはドゥルーズ自身がラウリーのように「在ること」、あるいはラウリーのように「な

ること」を求めているかのような、稀有な作家であったといえよう。ラウリーはアルコールと共に幻影（幻想）について描いているが、ドゥルーズにとって幻影（*fantasme*）とは、永遠回帰の場であり、思考の誕生を絶えず模倣し、絶えず再開する。それゆえ、この内的な再開において備給されるものは出来事の姿形をしているのである<sup>(45)</sup>。このような意味において、ラウリーの〈アルコリズム〉がもたらす幻影もまた、永遠回帰の場としての意義を持つ。そして幻影の力とは、〈死の本能〉のうちに潜んでいるのである。

ドゥルーズ自身の具体的言及は極めて少ないため、こうしたラウリーの印象に近いと思われる箇所を引用すると、例えば次のような場面がある。

「むっと吐き気を催すようなエーテルの匂い、メスカルはイヴォンヌの胃の中で、はじめ何の温もりもなく、ビールのように冷たく、ただ悪寒がした。(…)彼女は独り不気味な声をあげて笑っていることに気づいた。自分の中で何かが火種となり、燃えている。(…)それは夢だった。(…)この幻影は何なのだろう？姿形も道理もない、この思考は。(…)もう一杯メスカルに手を伸ばすと炎が消えた。すると突如として、かつての夫への絶望的な愛と優しさに包まれた彼女の存在、その全てが、思考の波となって押し寄せた。」<sup>(46)</sup>

イヴォンヌがここで経験しているものは、幻影という未知なる出来事の経験であるといえよう。そして未知なる出来事とは、すなわち未来とも等しいのであり、われわれが「現在」という時間を生きる中においては、未来もまた、あたかも幻影であるかのようにしか経験することができないのである。ゆえに我々の生において、経験可能な〈未来〉が生じることのできる唯一の場は幻影であり、そのような不確かな様態を伴ってしか、全き新しさ、そして未知なるものが姿を表すことはできない。生きている現在の中で、私たちが唯一見ることができ、そして証し立てることのできる新しさとは、おそらくは現在のところ「幻影」としてでしか、ありえないのである。しかし幻影もまた、瞬間はすぐに硬化され、過去へと移行していく。

こうした幻影に加えて、〈アルコリズム〉の時間効果は、ラウリー独自の仕方において記述されている。ラウリーにおける〈アルコリズム〉が他の二作品と異なるのは、たった一日の出来事を極限まで引き伸ばし、さらには複

数の登場人物の視点によって経験・記述することで、その時間性はまさしく「現在を硬化する」ものとして、極めて独自のかつ特異的であると指摘することができる。登場人物が飲酒する場面を描かないフィッツジェラルドとは対照的に、ラウリーはむしろ作中人物が飲酒する場面を提示する。しかし仮に飲酒について描写したとしても、時間に関わるものとしての〈アルコリスム〉の意義は損なわれることはないと言われているとドゥルーズはいう。

「アルコリスムが欲求の激しい形態として生きられるときにも、時間の深い変形が現出する。今度は、未来 (avenir) の全てが前未来 (futur-antérieur) として生きられてしまう。そしてこの複合前未来 (futur composé) は、恐ろしいほどに加速し、死に至る効果の「効果」を生み出すのである」<sup>(47)</sup>。

「前未来」および「複合前未来」もまた、フランス語独自の時制であり、ゆえにフランス哲学独自の時間性やその描写に密接に関わっているといえよう。前未来とは、未来のある時点において完了しているであろう動作や、その結果としての状態として言語化され、未来完了を示す時制である。ここでの複合前未来とは、先述の複合過去の働き、すなわち動作の急速な完了を示すという特性を有しているが故に、ドゥルーズはこれを「恐ろしいほどに加速」するものとして、その加速性に着目しているのである。

ドゥルーズは『火山の下』を詳細に論じることはなかったが、その理由として、次のような仮説が成立するだろう。すなわちラウリー自身がその書簡に記し<sup>(48)</sup>、ドゥルーズ・ガタリも言及した<sup>(49)</sup>ように、ラウリーはあたかも機械 (machinerie) として用いられ、ドゥルーズはこれを作動させたのである。そしてこの相互作用、ある種の共同作業の意義とは、ドゥルーズはラウリーが記した言葉の真意に即してラウリーの作品に遇し、そして最も誠実に応答しようとした証ではないだろうか。

思考の条件としての〈亀裂〉は不可避であり、また「人類において善良で偉大であったことは、すべて、自己破壊を急ぐ人々における亀裂を通して出入りするからであり、我々に提示されるのは健康よりも死である」<sup>(50)</sup>とドゥルーズは指摘する。そのような渦中においてなお、ラウリーが希求した健康とは「〈亀裂〉をよい終わり方をするように書き直すことを夢見て、決して

生命回復の観念を放棄しないラウリーの「ような健康」<sup>(51)</sup>であり、すなわち〈死の本能〉と共にありながらも生きることを終わらせない「健康 (santé)」という意味において、未来を実現する唯一の方法なのである。それはまさしくドゥルーズが〈死の本能〉と等しいものとした、ニーチェの「力への意志 (Wille zur Macht)」<sup>(52)</sup>を超克する方途でもあるはずである。ゆえにドゥルーズにとってラウリーは、自らの身を危険に晒しながらも、出来事を肉体に記すことでその永遠真理<sup>(53)</sup>を捉えようと果敢に〈アルコリスム〉実践し、〈亀裂〉を深め、崩壊への方途を不可避的に歩み進みながらも、真の「未来」を捉えようとした、唯一無二の先駆者なのである。

## 結 ドゥルーズの時間論における〈アルコリスム〉の真髓

〈アルコリスム〉の真髓とは、アルコールによって引き伸ばされた「複合過去」の時間を実現することによって、捉えることのできない「現在」を経験しつつ発見し、観察記述し、思考することを可能化するものとしての意義であった。すなわち〈アルコリスム〉とは、単なるアルコール中毒や酩酊、アルコールそれ自体ではなく、アルコールによってもたらされる「効果 (effet)」によるものであり、時間論的意義をもつ極めて重要な状態であり、現在および未来を顕現させる技法なのである。そしてここに生じた〈亀裂〉は不可逆的であり、アルコール本能がアルコールを求めるように、本能はその淵に群がり対象を備給する。〈亀裂〉と等しいものとされる〈死の本能〉は、「未来」の根源的原理とされるが、その時間の本質は「発狂した時間」かつ「蝶番が外れた時間」<sup>(54)</sup>である。すなわちそれは、常に予定不調和的であり、制御不可能であり、円環的循環を切断し逸脱するものである。この点においても、〈アルコリスム〉によって実現される時間と〈亀裂〉および〈死の本能〉は、不可分の関係にある。

ドゥルーズが書名として掲げた『差異と反復』、その名の真意とは、同じものしか招き入れることのできない循環を断ち切ることがかなう「真の反復」と、そのような真の反復によって生じる「純粹な差異」であり、それらは共に「未来 (avenir)」を実現するものであるといえよう。このように既存のシステムを超え出ること、そして逸脱してしまうこと、躍動、超越、その

力の根源を思考する可能性というものが、本論が対象とした三作品のうちに見出されていたのではないだろうか。そして唯一、この本能と逸脱を可能にする状態である「隔たりの同定」<sup>(55)</sup>こそが、〈亀裂〉を自らの表面に走らせる機会を与えるのである。ゆえにドゥルーズの〈アルコリスム〉とは、過去と未来が接続する唯一の時間である「現在」を捉えるために見出された方途であり、経験不可能な「現在」を捉える技法、さらには幻影として現れる「未来」を思考する方法でもある。そのような意味において、まさしくドゥルーズが希求したものは、三作品の中でもとりわけ〈ラウリーのアルコリスム〉であり、〈アルコリスム〉によって実現される幻影、すなわち「未来(avenir)」であったといえよう。

ドゥルーズは〈アルコリスム〉を単なるアルコール中毒や依存、酩酊、陶酔としてではなく、その渦中に留まることを可能化する時間の変容という点において重視した。現在を硬化させることで実現する非日常的な時間のうちに身を置き、経験可能となった時間を生き、思考し、言語化可能なものへと変容させるという意味において、とりわけ現在を捉える方法として〈アルコリスム〉のうちに時間論的意義を見出した。そして三つの文学作品は、このように〈アルコリスム〉によって実現されるもう一つの現在について、ドゥルーズに啓示を与えたのである。ゾラの『獣人』におけるアルコール効果と〈死の本能〉、そして〈亀裂〉は、ドゥルーズの時間論における根本的原理の骨子となり継承されてゆく。フィッツジェラルドの『亀裂』における「現在」は、アルコールを用いながらもその「効果」によって〈亀裂〉を経験しつつその渦中において発見され、思考され、言語化されている。そしてラウリーの『火山の下』においてアルコールと共に経験される多くの幻影のうちに、未来に身を置くことにも等しい現在、という新たな時間性を見出したのではないだろうか。主人公たちは、ただ自堕落に酒に溺れ、酩酊するのではなく、酩酊しつつも常に自己を見つめ、アルコール効果によって自ら体験しつつ観察し、思考可能となった「現在」を凝視し続けている。ゆえに〈アルコリスム(alcoolisme)〉の〈isme〉は、いわば「アルコール主義」とも言い得る確固たる〈イスム(isme)〉なのである。

これら三つの文学作品における時間性は、通常的时间、とりわけ「現在」においては経験不可能な時間のうちにある。ゾラの主人公が暴走する機関車という〈死の本能〉と共に疾走し、そして轢き殺されてもなお、死へと向

かつて暴走してゆく様も、フィッツジェラルドの主人公が自らの亀裂に気づき、その崩壊と再生の過程をあたかも「古びた皿のひび割れ」のように見つめることができたことも、ラウリーの主人公が己の死にゆく一日を驚くべき長さに引き伸ばされた時間性のうちに経験することができたことも、いずれも本来であれば「経験不可能な現在」の顕現である。すなわちそのような「現在」とは、私に〈亀裂〉が走る瞬間、そしてその亀裂が私をひび割れさせてゆく過程をまざまざと見つめることの叶う時間を生きることができ、死へと向かう特異な時間性の内を生きることである<sup>(56)</sup>。それこそが、ドゥルーズが《私の〈亀裂〉》と名指すものであり、このように私に走る〈亀裂〉を私自身が見つめることが叶う時間性を実現し、それを捉えることを可能化するものが効果としての〈アルコリスム〉であるという見立ても、ドゥルーズ哲学における時間論、その特異な成果であるといえよう。

こうした共通項に加えて、三作品の〈亀裂〉と〈アルコリスム〉が非常に異なる点は何であろうか。ゾラの『獣人』における〈亀裂〉を殺人欲求と解釈するならば、アルコールはトリガーであると考えられている。殺人を現実に行うことは、その欲求が〈亀裂〉という兆しに留った状態とは決定的に異なる、引鉄を引かれた後の自我の崩壊であるといえよう。加えて物語の終わりに、あたかも〈死の本能〉の象徴であるかのように多くの人間を乗せたまま暴走する機関車は、我々の生命が自らの意思で降りることのできない何か大きなもの内にあること、振り落とされれば容易く轢かれて死んでしまうこと、たとえ振り落とされたとしても機関車それ自体は加速し走り続けてゆくこと、すなわち大いなる死と生の象徴でもある。フィッツジェラルドの『亀裂』は、アルコールによって生じ発見された〈亀裂〉を亀裂のままに保ちながらも、どうかして自我の崩壊を回避しようとしていること、そして三部作（『取り扱い注意』、『接ぎ合わせ』）を通して、亀裂を抱えながらも崩壊せずに生き続けることを模索する人間の様子が描かれている。そしてラウリーの『火山の下』もまた、〈亀裂〉はアルコールによって生じ、深くなるが、それは個人の亀裂でもあり、同時に二人の人間の間に生じる亀裂でもあった。夫婦はあたかも岩盤に〈亀裂〉の入った状態で崩落へと向かいながらも、やはりアルコールと共に、〈亀裂〉と共にある状態を限りなく引き伸ばしながら経験し、捉えようとする。

とりわけラウリーの物語は、ドゥルーズが「思考は性の変身 (*métamorphose*)

であり、思考者は夫婦の変身である」<sup>(57)</sup>と意義を見出す「私たち」の思考の体現であり、〈私たち (nous) の亀裂〉として変身を遂げた思考者として、そしてほとんど同時刻に訪れる二人の死の瞬間としても、他の二作品とは非常に異なるものであったといえよう。おそらくドゥルーズは、決して崩壊を望んでいるのではなく、ひび割れた自己として、見つめることのかなう状態として保たれた〈亀裂〉を、経験されうる時間の持続の中で、まさしく複合過去の時間を生じさせる重要な契機として見出している。それはあたかも時間の襞 (plis) を伸ばすようなものである。通常であれば「現在」という連続は押し開くことのできないほど微細に折りたたまれ、ぴったりとくっつき、閉ざされ、そして唯一経験可能な「現在」という名を与えられているにもかかわらず、現在は不断の瞬間として迎え入れられては、実際のところその瞬間は捉えることもできず即座に過ぎ去っていく。それは常に巻き取られていく糸の上に在るかのような状態であり、我々は常に現在を経験していながらも、歩みを止めることはできず、糸の上に接した足を静止させ、瞬間として捉えることはできない。それは不断の運動であり、不可避の連続である。現在はあくまで現在として此処に在るはずであるにもかかわらず、或いは「今」という呼称を与えられているにもかかわらず、それらの名はあまりにも無力であり、我々は現在と名指される時間について、それを漠然とした囲い込みによってしか、常に、そして永遠に、言い表すことができないのである。

ドゥルーズはこうした「現在」という時間が思考の対象として根本的に孕む困難を打ち開く方法を〈アルコリズム〉のうちに見出した。〈アルコリズム〉とは、単なるアルコール中毒や依存症を示す語としてではなく、アルコール効果のもとに通常では捉えることのできない現在の時間性を限りなく引き伸ばし、フランス語における複合過去の時間性、すなわち現在を把握可能にする機能として、ドゥルーズの超越論的经验論を体現しているといえよう。それは現在という時間の襞の内に入り込み、それを経験し、観察し、記述可能にする技法であるともいえる。あたかも折りたたまれた線としての時間を引き出し、その線をさらに押し広げては襞を引き伸ばし、その時間の襞のうちに、すなわち「現在」の只中に限りなく留まるための技法。このような意味において〈アルコリズム〉は、既存のアルコール中毒や依存という状態にとどまるものではありえず、むしろドゥルーズが創出したひとつ

の〈isme〉であり、まさしく「概念」として機能しているのである。

「(…) 亀裂を走らせる程度に、束の間眺め、少しだけアルコリズムになり、僅かばかりの狂気を手に入れ、微かな自殺願望と、束の間の奇襲をかけて、それでも亀裂が修復不可能になるほど致命的になる手前で留めるというのか。全てが哀しんでいるかのようだ。事実、いかにして岸边に滞留することなく、表面に留まることができるのだろうか。いかにして (…) 自己を救済するというのだろうか。」(『哲学とは何か』)<sup>(58)</sup>

ドゥルーズの〈アルコリズム〉とは、その水に押し流され、飲み込まれてしまうかもしれない危険を冒しつつも、アルコールによって「現在」を硬化させ、通常では不可能な時間を生きることを可能化する。それは思考の本質でもあり、「現在」という瞬間のうちに隠された経験不可能な時間と出逢い、時間の壁の内部に這入り込み、その壁の内に滞留し、そこから自己に走る〈亀裂〉を発見し、亀裂を見つめつつ思考を可能にするという点において、特異かつ危険な技法でもある。ゆえに真の思考とは常に哀しみを纏い、亀裂が崩壊へと向かう運命に抗うことはできないが、とりわけ死へと向かう「未来 (avenir)」を思考するドゥルーズの時間論において、〈アルコリズム〉は極めて重要な意義をもつ〈isme〉なのである。

[了]

## 凡例

頻出するドゥルーズの著作には以下の略号を用いた。なお本論の引用箇所については、三つの文学作品を含め、邦訳を参照しつつ筆者の責任において訳出したことを付記する。DR: Deleuze, Gilles. 1968. *Différence et Répétition*. PUF. (ドゥルーズ、ジル 2007『差異と反復』上下巻、財津理訳、河出書房新社)、LS: Deleuze, Gilles. 1969. *Logique du Sens*. Minuit. (ドゥルーズ、ジル 1986『意味の論理学』岡田弘・宇波彰訳、法政大学出版局。ドゥルーズ、ジル 2007『意味の論理学』上下巻、小泉義之訳、河出書房新社)

## 注

- (1) Cf. 小谷弥生 2015 「フロイト超克としての「反復」の切断」(『ドゥルーズ思想研究報告書(「ドゥルーズ研究の国際化拠点の形成」課題番号-26284004, 平成二十六年～三十一年度科学研究費助成事業 基盤研究 B)』2014年、pp.62-75.
- (2) Cf. DR. p.100.
- (3) Cf. DR. p.393., Maurice Blanchot, *L'espace littéraire*, N.R.F., 1955.
- (4) 本論において「fêlure」の語は統一して〈亀裂〉と表記する。現行の邦訳において、この語には主に「亀裂」(『差異と反復』、財津訳)と「裂け目」(『意味の論理学』、小泉訳)の二語(この解釈に関わる「亀裂」の訳語については、正確にはフィッツジェラルドの邦訳における「崩壊」を含め三語)があるが、本論は最適な語として判断した〈亀裂〉を採択する。
- (5) DR. p.118.
- (6) Emile Zola, *Œuvres complètes tome 6*, Cercle du Livre Précieux, 1967.
- (7) F.Scott Fitzgerald, *The Crack-Up*, New Directions; Reprint edition, 2009., F.Scott Fitzgerald, trad. Marc Chénétier, *La fêlure*, Gallimard, 2012.
- (8) Malcolm Lowry, *Under the volcano*, Harper Collins, 2014., Malcolm Lowry, trad. Stephen Spriel, *Au-dessous du volcan*, Buchet/Chastel, 1976.
- (9) 三つの文学作品と〈亀裂〉のテーマについての詳細は以下の拙論を参照されたい。Cf. 「ジル・ドゥルーズ前期著作における亀裂(fêlure)の意義について —ゾラ、フィッツジェラルド、ラウリーとともに—」(『社藝堂』第6号、2019年、pp. 113-142.)
- (10) LS. p.373.
- (11) LS. p.184.
- (12) Cf. Emile Zola, *Œuvres complètes tome 6*, 1967, pp.13-21.
- (13) LS. pp.373-386. 『獣人』の序文として掲載された文章は、およそ百箇所以上の削除・修正を経て、『意味の論理学』収録時には、亀裂と〈死の本能〉、及びフィッツジェラルドとラウリーへの言及が加えられている。ゆえに、本論においては『意味の論理学』に掲載された「ゾラと亀裂」を主に参照する。(Cf. 小谷弥生、『社藝堂』第6号、2019年、p. 133、注7参照。)
- (14) LS. pp.180-189.
- (15) DR. p.118.
- (16) この一文は『獣人』の序文として掲載された際には記述がなく、『意味の論理学』(1969)に付録「ゾラと亀裂」として再録される際に加筆された。
- (17) DR. p.97.
- (18) LS. p.373.
- (19) 小泉義之訳『意味の論理学(下)』河出書房新社、2007年、p.260.
- (20) LS. p.184.
- (21) LS. p.184.
- (22) 自殺、狂気、薬物、アルコールの使用のうち、薬物とアルコールが最も申し分のない方法であるとドゥルーズはいう(Cf. LS. p. 182.). ドゥルーズ哲学の解明・探求という立場よりこれらの記述を引用・参照するが、ここで言及された方法について、筆者が賛同あるいは礼讃する意図ではないことを注記する。
- (23) LS. pp.184-188. なお邦訳では *Alcoolisme, manie dépressive* は「アルコリズム、躁鬱」と記載さるが、躁鬱を示す語は *cyclothymique* であり、アルコリズムの

説明に該当する *manie dépressive* を示す日本語はむしろ「衰弱させる偏愛」であることを主張し、拙訳を採用している。

- (24) LS. p.184.
- (25) LS. p.185.
- (26) 目黒士門『現代フランス広文典』白水社、200年、pp.252-253.
- (27) Cf. LS. p.186.
- (28) LS. p.188. この〈亀裂〉の定義は『差異と反復』から『意味の論理学』に一貫する。
- (29) LS. p.188.
- (30) LS. p.374.
- (31) LS. p.373.
- (32) Emile Zola, *Œuvres complètes tome 6*, 1967, p.61.
- (33) LS. p.378.
- (34) LS. p.375.
- (35) ドゥルーズがフィッツジェラルドに言及した箇所は全著作を通しておよそ二十六箇所あるが、本文中で「半年間、ビール一杯でさえも嗜まなかった」と記されるように、『亀裂』は〈アルコリズム〉というよりはむしろ〈亀裂〉の意義が大きく、アルコールに関しては『グレート・ギャツビー (*The great gatsby*)』(1925)における「複合された過去(「十年の酩酊のような五年の不在」や「グラスのように割れる自己」が重視されていると考えられる (LS. pp.184-188.)). ドゥルーズのフィッツジェラルドに関する言及は参照先を明記しないものも散見され、すでにドゥルーズの中にあるイメージによって語られている部分も多い。
- (36) フィッツジェラルドの「*The Crack-Up*」伝語版は「*La fêlure*」として周知されているが、ドゥルーズはこれをさらに「*La «fêlure»*」と強調することで、この作品に見出されたものが何よりもまず〈亀裂〉であることを看過してはならない。さらに「皿」という点において、ここでの「*fêlure*」とは〈亀裂〉やひび割れであって、「裂け目」ではあり得ないのである。(Cf. 渥美昭夫・井上謙治編『フィッツジェラルド作品集3』荒地出版社、1981年、pp.184-189.)
- (37) F. Scott Fitzgerald, *The Crack-Up*, *New Directions*, 1945, p.72.
- (38) LS. p.187.
- (39) LS. p.186. 『亀裂』はともあれ『グレート・ギャツビー』はどうかといえれば、確かに中心人物であるニックやギャツビーはアルコールを欲していないことがわかるものの、作品全体としては常にアルコールや飲酒の場が存在し、そしてアルコールをひとつの契機として運命が暗転する点などにおいて、ドゥルーズのフィッツジェラルド像はいささか当てはまらない部分もあるといえるだろう。
- (40) のちに「逃走線」に関する思考が展開される頃になると、フィッツジェラルドのアルコールは闘争機械 (*la machine du guerre alcoolique de Fitzgerald...*) と記されるようになる (Cf. Gilles Deleuze et Claire Parnet, *Dialogues*, 1977; 1996, p.171.)
- (41) Cf. Gilles Deleuze, *Deux régimes de fous et autres textes 1975-1995*, Minuit, 2003, p.248.
- (42) LS. p.187.

- (43) Cf. Gilles Deleuze, *Cinema 1. L'image-mouvement*, Minuit, 1983, Chap.9.
- (44) ラウリーに関する言及は十二箇所ほどであり、ドゥルーズ自身の具体的な言及も乏しく、詳細な説明はなされていない。ドゥルーズと文学作品の関連を扱った書物においても、ラウリーについての言及すらないもの、語り得ていないものが散見される。(Cf. Andre P. Colombat, *Deleuze et la Littérature*, Peter Lang Publishing Inc, 1990. / Bruno Gelas et Hervé Micolet, *Deleuze et les écrivains*, Éditions cécile default, 2007. / Catarina Pombo Nabais, *Gilles Deleuze: philosophie et littérature*, L'Harmattan, 2013.)
- (45) LS. p.256. タナトスとして描かれる永遠回帰の時間、および〈亀裂〉と差異の関係については以下を参照されたい (Cf. 檜垣立哉『瞬間と永遠 ジル・ドゥルーズの時間論』、岩波書店、2010年、pp. 55-57.)
- (46) Malcolm Lowry, *Under the volcano*, pp.422-423.
- (47) LS. p.186.
- (48) Malcolm Lowry, *Choix de lettres*, tr. fr. Denoël, p.87.
- (49) Cf. Gilles Deleuze et Félix Guattari, *L'Anti-Œdipe*, Minuit, p.133.
- (50) LS. p.186.
- (51) LS. p.188.
- (52) Gilles Deleuze, *L'île déserte et autres textes*, Minuit, 2002, p.164.
- (53) LS. p.186.
- (54) DR. p.120.
- (55) LS. p.188.
- (56) 前掲(3)のように、ドゥルーズの時間論における「未来 (avenir)」とは、ブランシヨの「死の本質としての未来」であると解釈できる。しかしゾラの avenir との運命的な合致によって、ドゥルーズはこれを自身の「未来」として位置付け〈instinct de mort (死の本能)〉と共に思考したともいえるだろう。こうしたゾラーブランシヨードゥルーズの「未来=avenir」の系譜については機会を改めて論じる。
- (57) LS. p.256.
- (58) Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Qu'est-ce que la philosophie ?*, 1991, pp.43-44.
- (59) LS. p.184.